

今を生きる社会人たちは、キャリアという大きな海を
どんな船に乗って航海しているのだろう。
港に立ち寄るさまざまな社会人たちの船=仕事から、
これからの仕事・働き方へのヒントを探ります。



人生に、少しでも「いい変化」を。

NHK コンテンツ制作局 第2制作センター (社会) ディレクター **大里和也**

1991年東京都生まれ。早稲田大学文学部考古学コース卒業後、NHK入局。佐賀放送局に配属され『ドキュメント72時間』『プラタモリ』などを制作。2018年からは東京本部で『クローズアップ現代』『映像の世紀バタフライエフェクト』などを担当し、現在は『新プロジェクトX』を担当中。バンドと映画とウニが好き。

取材・文／今井夕華 撮影／竹内弘真

大里和也さんのお仕事 テレビ番組ディレクター

① 一番のやりがい

番組を観た人の人生に、少しでも「いい変化」を起こせたとき。

② 一番大変なこと

構成、台本執筆。膨大な情報を整理し、心を動かすストーリーをつくるのは時間がかかります…

③ こんな人におすすめ

旅行しておいしいものを食べるのが好きな人。
一人でコツコツが苦ではない人。

研究の道を求める同級生と 興味の幅が広い自分

「小さいころから本を読むのが大好きでした。ジャンル問わず読んでいたなかでも、特に印象深かったのが小学5年の時に出会ったハワード・カーターの伝記。ツタンカーメンのお墓を見つけた人で、考古学ってこんなに面白いんだ！と衝撃を受けたんです。そこからぼんやり将来のことを意識し始めて、中学受験をして早稲田中高に進みました。大学では実際にエジプトの遺跡発掘にも行ったんですよ」

天文学やミステリーに関する本も好きで、ほかにもテニスコート、バンド活動、映画サークルなど、興味の幅が広がった大里さん。

偶然読んだ本がきっかけで エジプト考古学のとりこに



編集室での大里さん。編集期間中はこの部屋で過ごし、考えごとをするときは局内を歩き回っている。

同級生たちが研究を突き詰めたいと大学院への進学を決めるなか、自分にはそこまで突き詰めたいことってあるのか？と進路に悩む。そんな時思い出したのが、遺跡調査のことだった。

「テレビ番組が取材に来ていたんですよ。あつ、こういう形で関わることもできるのかって。例えば音楽が好きならバンドマンになるだけじゃなくて、音楽番組をつくるとか、マネージャー、サウンドエンジニアになる道もある。興味の幅が広いことは、ディレクターにとって強みだったんです」

「正しい」ことは大前提。 より「わかりやすく」届ける

ADという肩書きがないNHKは、入ってすぐにディレクターになる。

「ネタ探しから始まり、構成、取材、台本

執筆、編集など仕事は多岐にわたります。基本的には映像をつくるのがディレクター。プロデューサーはできあがった映像のチェックや予算管理などを担当します」

『新プロジェクトX』では半年をかけて1本の番組をつくるそう。まずはテーマを決めるのに1カ月。そこから事前取材を2カ月。本番撮影を3週間。その後は編集に5週間かけ、スタジオ収録を経てまた1週間ほど編集。ナレーションやテロップ、CGを入れ、やっと放送という流れ。

「掛け持ちはせず、その1本に集中できるありがたい環境です。テーマについてかなり詳しくなりますし、知らなかった内容だとしても毎回大好きになりますね」
ロケでは一人4時間ほどかけてじっくり話を聞くとか。

「撮った映像のうち、使うのはほんの数十



手書きの取材ノートや資料の数々。ノートやペンに特にこだわりはなく、書ければなんでもOK。



全国放送番組を初めて手掛けの際の、視聴者の方の感想ブログ。嬉しくてずっと大切にしている。

秒。正しく伝わるように編集することは大前提です。その人が思っていることを、よりわかりやすく視聴者に届けるため、責任をもって徹底的に試行錯誤しています」
特に印象深かった仕事は、入局2年目につくった林業のドキュメンタリー。後継者に技術を伝承するため、一般的には50年で伐採するスギやヒノキを200年かけて育てるという取組を紹介した。
「放送後、番組を観た方のブログを見つけたんです。『私も孫の代まで残る仕事を本気でやりたいと思った』と書かれていて。心が震えるくらい嬉しかったんですよ。本当にささやかかもしれないけれど、この人の人生に『ちょっといい変化』が起きた。華やかな音楽番組にも憧れはありましたが、人生を変えられるのはドキュメンタリーだ。なつて。以来、ドキュメンタリー一筋です」